











# 白伯新書聞

文藝欄

サントレーヴィの一團（七八名）  
一組（）が夜さすがら頭はやし  
各部落の家々をねり歩く。  
今宵も例のはやしの音が  
そこ、こゝに響いてゐる。

『喪心々しい』寝床に戻ると  
此度は隣の前邊でやり出した  
そして暫時して止んだ。  
とまたその向ふで始めた。  
「一實は、それが、  
すつかり空家なんだからな  
一隣も、そのまた隣も、  
ご丁寧に訪問して尻かれ！  
やあ、お氣毒さま：へへへ  
初めて空家と氣附いて  
口あんぐり拍子抜けた  
所謂ビエロ達の  
顔模様が想像され  
思はず苦笑した。

皮肉な滑稽悲哀さが、  
そこに横たはつてゐる。  
さう、むろん俺も一個の  
palacoにしか過ぎないさな  
——(聴子)——

ふと夜半に  
サントレーザに起されて  
断りもきれず卵をやるも  
不景氣に  
サントトレーザのバイヤソよ  
ビンガどころか金も何もな  
あき家とも  
知らずに唄ひはやしをる  
サントトレーザよ笑ひもされ  
夜もすがら  
つぎつぎに唄ひはやしをる  
サントトレーザよ空家多きに  
燈のなきは  
あき家とし知れバイヤソよ  
この並びはも空家多きに

ヒレ  
Hotel D'oeste  
Uberaba - Minas  
-----  
謹賀  
ホテ  
館 並

# 新年 ル・ド工ステ 運送業 主 中村牛哉

吉岡重雄 惟村角太郎 山本長俊 鷺野正俊 濱田嘉太郎 楠本正彦 中島龍起 福水政義 斎藤彌査久  
(會員順序不同)

# ○大起義修節後歸 **Hotel S. Paulo** R. General Osorio, 24 - Tel.: 390 **Ribeirão Preto**

郵函一六番  
よしてお目出たう

「世を思ひついたところから、そんな立心の力も知れない。」  
曰く、「きりぎりす」  
そこには、唯ひと筋、何處までも續く道があつた。左側は、これもあ渉しもない類の連續で、やつた。右側は、見あらすと、の急な斜面の、雜草を踏んでゆるが岸を駆けてゐる大海原。そしてその岸までゆくには、こゝへは、から入り込んだ。岬のではばかり、そこは、政は殆どとつたやうなところ、君の間で行くために、この一本丘の下は濱邊で、遙かに遠い海を、毎日眺めては日を送るその子供がゐた。その子供の中の一人は、庭の軒へ、きりぎりすの籠を下げて、その中に二三四匹この虫を飼つてゐた。  
「君、きりぎりすは、かうして喝くんだよ……」その少年はそんな事を云ひながら、唇を輕く合せて、その間からスープと息を出して、鳴く音を巧に眞似た。  
C、ぎんやんま

龍原藤助  
堀市郊外モロンビー

植木鉢の跡を残して春の草  
背戸畠の錆びたる鍼や春の草

晴着疊ふ姉の島田や春の夜  
枯れたる郵便受や春の草

追驅るデ・スボールや春の草  
柳

若草をうつして引くや春の水  
香 露

春の夜や又俳人になりすまし  
捨

棟上の祝ぎ酒酌むや宵の春  
夜半の春ボツツ／＼と雨の音

春の夜や隣家狂女の高笑ひ 石

恭賀新  
昭和五年一月一日

謹賀新年  
雜貨商  
松隈商店

モ線コンキスク駆  
ラゼアード耕地

# 恭賀新年

恭賀新禧

文藝  
講談  
類物語  
五  
あ、あなたは蝶  
最も彼の可憐な態百合の花も  
散つた後であつた。うまこやし。  
淡紅色の帽子が其處らに歸つてゐた。恩は唯一人で、随分歩いて行つたやうな気がする。だ  
いで、この季節は或はもつと先きの、早春の頃のことであつた  
かも知れない。その頃の、少しも知れない。その頃の、少  
年の心は、何時でも烟いちりをしてゐた。そして、非常に神經質な顔をしてゐた。そ  
の家の井戸の周囲には、辯慶蟹が、ウヨウヨゐるのであつた。近所の子供達は、  
彼の小父さんも辯慶蟹になつてゐるなどと考へたこともあつたのは、この娘が、赤練瓦呼でもこの蝶が入つてきた。そして、長じて後には、女工の頭  
にならうなどと考えたこともあつたのは、この娘が、赤練瓦のやうな色彩であつたので、こ  
れの業と貢ぐことをひどく思つた。毎日の日課のやうにして、海へ行く事を、私の両親はどんなぐ傍にあつたので、竹の籠砲に心配したかもしれない。だが、その頃の私は、海底へ潜り込んで、クナ・ガンゼの類を、巧みに探ることの出来る自信を有つてゐた。一人で歩いて行くと、右側の土堤の草叢から、チヨツギー、チヨツギーと間を置いて鳴く蟲があつた。夫婦は、きりぎりすで少年達は、唄ひながら、も等々あつた。この思ひ出と共に、私は彼の裁判官の氣もづかしい小父さんを思ひ起す。その小父さんは、何時でも烟振り廻した、ぎんやんまの、彼の懐かしい淡緑とセビアの感覚は、少年達の胸を仄しくのしかけた。私は、今でも、彼の負けた。この邊りにあつたので、遊び場で、入陽が海の上を一めんに灼く頃ほひ、少年の群は、その小さな砂丘へのぼつて、長い竹竿をさげんやんまをとつた。  
土地の少年の一群は、遊び場で、入陽が海の上を一めんに灼く頃ほひ、少年の群は、その小さな砂丘へのぼつて、長い竹竿をさげんやんまをとつた。  
この邊りにあつたので、遊び場で、入陽が海の上を一めんに灼く頃ほひ、少年の群は、その小さな砂丘へのぼつて、長い竹竿をさげんやんまをとつた。

さゝやかな空氣の浮動は、  
美しい寂寥の小波となつて、  
全身を淨化する。  
さゝやかな空氣の浮動は、  
美しい寂寥の夜と寂しみよ、  
全身を淨化する。  
さゝやかな空氣の浮動は、  
美しい寂寥の星と見入り、  
全身を淨化する。  
さゝやかな空氣の浮動は、  
美しい寂寥の月に、  
全身を淨化する。  
さゝやかな空氣の浮動は、  
美しい寂寥の夜と寂しみよ、  
全身を淨化する。  
さゝやかな空氣の浮動は、  
美しい寂寥の星と見入り、  
全身を淨化する。  
さゝやかな空氣の浮動は、  
美しい寂寥の月に、  
全身を淨化する。

明けましてお  
内外品雜上  
謹賀新年  
活動寫眞常設  
松關

日出度う  
貨商  
村 万 作  
リベロンブレーント市  
公 設 市 場 内  
館  
年  
常  
一  
熊 槌  
油 香  
郵 函  
十 六

謹 賀 新  
昭和五年一月  
內外品雜貨  
野 地

# 年 三 市 面 サ ン タ ・ ル シ ア 耕 地 モ 線 サ ラ ン デ ー 驛 販 商 モ 線 ベ ド レ グ 一 リ ヨ 市

**Relojoaria e Ourivesaria Japoneza**  
Antonio Tanamati  
**謹賀新 江**  
御旅館並に貸自動  
コンヘータリヤ

新年  
藤常吉  
郵函イガラバ一バ市  
電話五十六一〇二  
棚町常雄  
新  
柳町時計店  
郵函モ線イガラバ一バ市  
二五













## 借金漫論

「除夜の鐘まで攻められた  
頭でなし」川柳

新年早々から借金の話でもないが、一年の計は元旦にありで一つ借金の解説をするのも當今不景氣には新年おめでたうと云ふより気がきいてる。

借金にも國家が外債を起すのから、一寸電車を借りる小さい所まで種々あるが、金を借りるのに何か抵当物を提供するの普通で、それに保証人がなければ成立しない。

國の銀行團からサンパウロ州政が借りた二百万ポンドはコヒの鐵道送状を一俵一ポンドとして抵當に入れ、聯邦政府が保證に立つて居る様なものである。これら云ふと昨年の十一月に英

國の銀行團からサンパウロ州政が借りた二百万ポンドはコヒの鐵道送状を一俵一ポンドとして抵當を入れ、聯邦政府が保證に立つて居る様なものである。これ

は年九歩形で動きがとれないし、例の外債も本來借りられるものとして今その貸付け方法の内容を見て置くのも必要ではある。

業者向きの長期低利であるから、若しくは日本人農業者には廻はれ難いが、目下貸し出し停止の形で動きがとれないし、例の外債も本來借りられるものとして今その貸付け方法の内容を見て置くのも必要ではある。

金融事務を獨立したもので、コヒの鐵道送状を一俵一ポンドとして抵當を入れ、聯邦政府が保證に立つて居る様のものである。これは一九二六年に珈琲局の

金融事務を獨立したもので、コヒの鐵道送状を一俵一ポンドとして抵當を入れ、聯邦政府が保證に立つて居る様のものである。これ

は年九歩形で動きがとれないし、例の外債も本來借りられるものとして今その貸付け方法の内容を見て置くのも必要ではある。

金融事務を獨立したもので、コヒの鐵道送状を一俵一ポンドとして抵當を入れ、聯邦政府が保證に立つて居る様のものである。これ

は年九歩形で動きがとれないし、例の外債も本來借りられるものとして今その貸付け方法の内容を見て置くのも必要ではある。

金融事務を獨立したもので、コヒの鐵道送状を一俵一ポンドとして抵當を入れ、聯邦政府が保證に立つて居る様のものである。これ

は年九歩形で動きがとれないし、例の外債も本來借りられるものとして今その貸付け方法の内容を見て置くのも必要ではある。

金融事務を獨立したもので、コヒの鐵道送状を一俵一ポンドとして抵當を入れ、聯邦政府が保證に立つて居る様のものである。これ



恭賀新年

大野鶴龜醸造所

上等醤油  
並精製酢

Dr. Ivan M. Vasconcellos

MEDICO E OPERADOR

Cia. Brunswick do Brazil S.A.

Rua Ypiranga, 14-C, Tel. 4-6237  
End. Teleg. "BRUNSWICK" - S. PAULO

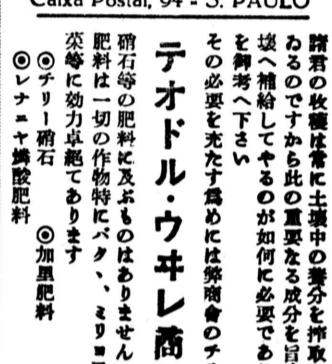


は用御の切一品屬附び及臺突玉  
會商クイウスンラブ

いさ下用利御法便の賣販賦月

THEODOR WILLE & CIA.

RUA LIBERIO BADARÓ, 52  
Caixa Postal, 94 - S. PAULO



テオドル・ウキレ商會

諸君の收穫は常に土壤中の養分を採取してゐるのですから比の重要な成分を目指して耕作に努力せられてゐます

肥料は一切の作物特にバク、ミリョ及野菜等に効力卓絶であります

◎チリ・硝石 ◎加里肥料

諸君の收穫は常に土壤中の養分を採取してゐるのですから比の重要な成分を目指して耕作に努力せられてゐます

肥料は一切の作物特にバク、ミリョ及野

菜等に効力卓絶であります

◎チリ・硝石 ◎加里肥料

諸君の收

拓植組合批判雜談會

▲ 年末某所で四五人の中老者ある。本名を擧げても差支はない。海興は近來滅切り良くなつたな。

○ ナー、拓殖組合と云ふ。ナーテ出で、結構なことだね。

記者 僕はいつかあれをグリード立役が出来たからですよ。丁度日伯における時報のやうなものでしやう。

▲ いやそらばかりも云へないのは結構なことだね。

記者 僕はエスコラールとひやかしたものが、此頃はそうでも無くなつた。執務時間は改正される。社員の権利のビクニックスはボエスコラールとひやかしたものだが、此頃はそうでも無くなつた。執務時間は改正される。社員の権利のビクニックスはやる、白鳥君中々洒落れたことをやる。其所へ行くと組合は滅々々々で大勢の社員はあるが、殆んど仕事がないと見え、てんでに字跡を綴つたり繪をかいたりしてゐる。僕は此の間一つへ。ナーブつたね。何所やらで大勢人の集まりで繪などをかきおる。私も書き度し。

▲ アー、そう／＼スターを何枚か壁に貼り付けてありますね、自由書の稽古なんですかと云ふ。云ふですか、組合も中々商賣場を出して来たんでやう。あれは格別の手品ばかりをかきおる。僕はだから組合なんか殆んどへつたことがないから知らんが、繪をかいてるとほんの初耳です。お隣のヤンバウトがそのエタッカなら移住地の方は大勢でしやう。

▲ 然し別れるだから致分がいいでせう。

○ 僕はだから組合なんか殆んどへつたことがないから知らんが、繪をかいてるとほんの初耳です。お隣のヤンバウトがそのエタッカなら移住地の方は大勢でしやう。

▲ 赤ン坊も三年たてば三ツになる。(一同笑ふ)

記者 元談云つちやイケない割業の話だなんて、モウ何年になると思ふね、足掛三年九月年じやないか。

▲ それならモ少し何とかなりそうなものですがね。

記者 そりやなつてますよ、土地は買ふ由は僕る、マキナは据え込む、社員はウンとふやす、これで植民が一向に来ないと云ふだけのことですよ。日本にある人間は不都合ですな、ブラジルに來ないなんて

（記者） 納つけて引張つて來ちゃう  
どうですか。  
▲ まさか羊じであるまい  
組合はね、ありや獨りよ  
がりと云ふものです。梅谷君  
などは猫がまりを持ったやう  
に植民事業が面白くて叶はさ  
無心でジャレてる所です。す  
れども土地が買へた、それ官有  
地が旨く貰へた、と云ふこと  
が愉快でたまらず、こうして  
あゝしてと色々空想に耽つて  
ゐるが、何とも云へず面白  
のですよ。つまり植民事業が  
ケ敷いもので不愉快至極な  
のだとは、未だ解らないから  
ですよ。

▲ だつて現金で土地買ふを  
んて誰でもやれるじやないで  
すか。官有地貰ひ、これだけ  
て誰でもやれますよ。

記者 そこです、そこがアラ  
ルでは少しも珍らしくないの  
だが、日本では兎もも功名手  
柄とされるのです。バラード  
の福原八郎君等も百万町歩  
つたといふのが得意なのです  
然し仕事はこれからなので  
植民をどう生かして行くか  
福原君も苦しみ頭を悩むこと  
せり。意地づくでやりかけ  
やうなものゝ、だんゝ先  
見えて來の福原君も氣が  
じやしないんせう。小供の  
地も資本家の意地も、意地  
なりやちがつたことは無い  
らね。

○ 移住組合などでの出来  
の事に聞かねばならぬ事  
ばねばならぬ事が澤山ある  
に、イヤに叫振つて居て…

記者 いやそう云ふ積りは無  
のだけれど、其間は官吏上  
でまだ叫ばねけないから組  
に居ても尙縣廳に居るやう  
ツモリで居る。それで倒か  
は高振つて居るように見える  
そうではない。

▲ だつていつもホテル  
つて居て何所へも顔出しせ  
じやないですか。

◎◎ そして胡麻蠅ばかり近  
けて……

記者 いろ／＼です。日本云々の氣に入らぬといふのであります。組合の人事課は、送つてくるのは別として、送つたのは大抵武石が担当する所ですな。以前牧タハカ手を焼いたから、やうですが、一体誰がやるのですか。

# 池圓貢新年

海外興業  
アニアイグ  
移代理  
ゴヤス州ア  
第一精上内  
主任松安  
地話人  
第一植民地隣接地帶八百ア  
地味、交通等第一植民地と  
尙當アナボリス町市街地  
(開口二千メートル奥行四  
乃至八百ミルレース  
六番  
Casa Japoneza  
OKADA & OTA  
Caixa, 166 — Rua São Luiz, 83  
Estação, Marília, Paulista

# 株式會社 伯國支店 民 垣 部

Empreza de Colonização de Annapolis  
Rua do Commercio, 3, ANNAPOLIS, E. DE GOYAZ

# NIPPAK SHIMBUN

Jornal Japonez de maior circulação no Brasil

Anno XVI

São Paulo — Quarta-feira, 1 de Janeiro de 1930

Num. 657

## Grave incidente na alfandega de Dairen

Erige-se em Tokio um monumento ao Marechal Yamagata

## Interessante demonstração de sanidade phisica da população urbana em Tokio

Mussolini quer apreciar artes japonezas em Roma

### NIPPAK SHIMBUN

Propriedade e direcção de:

SACK MIURA

Redactor:

Jorge T. Midorikawa

Redacção, Administração e Oficinas

Rua da Liberdade, 146

Caixa Postal, 375

Telephone, 2-3926

Enderço Telegráfico "NIPPAK"

SÃO PAULO - BRASIL

ASSINATURAS

Para o Brasil:

Por anno ..... 300000

Por semestre ..... 165000

Número avulso ..... 500

Para o Exterior:

Por anno ..... 600000

ANNUNCIOS

Temos à disposição dos interessados uma tabela completa de preços para anuncios nesta folha. Telephone 2-3926

### O incidente ocorrido na alfandega de Dairen

TOKIO, Dezembro de 1929 — A alfandega de Dairen, como todos sabem, foi inaugurada de acordo com o tratado sino-japonês de 1907. Nesse tratado, ficou estipulado que todo o quadro de funcionários da referida estação fiscal, inclusive seu inspector, será de nacionalidade japonesa, o que deu á mesma um aspecto de participação japonesa.

Segundo uma comunicação que acabamos de receber, de uma fonte fidedigna, soubemos com surpresa que o governo nacionalista de Nankim está cogitando nomear duas autoridades de elevada categoria, entre pessoas de outra nacionalidade, com poderes para conferir e classificar as mercadorias que transitam pela mesma, facto que veio causar sensações nos nossos meios oficiais, industriais e comerciais.

### Monumento ao Marechal Yamagata

TOKIO, Dezembro de 1929 — Por iniciativa dos condes Goto e Kiyoura, visconde Shibuzawa e outros elementos das nossas rodas mais altas da política, industria e commercio, está sendo confeccionado pelo escultor Seibo Kita-

mura, um monumento ao marechal Yamagata, grande herói da guerra russo-japonesa e um dos próceres do exército nipônico, devendo ser inaugurado em junho de 1930, em um logar que ainda não foi definitivamente determinado. O monumento será assentado sobre a base feita de mármore, que terá 7 metros de altura, sendo montado a cavalo. A altura aproximada do monumento será de 4 metros.

### CONVOCAÇÃO DO PARLAMENTO JAPONEZ

TOKIO, 26 de Dezembro — O imperador convocou oficialmente o parlamento.

### O exame de sangue da população de Tokio

TOKIO, Dezembro de 1929 — Realizou-se no dia 25 do mês passado, no Laboratório de Analyse Physica desta capital, o exame gratuito de sangue, tendo comparecido ao mesmo 1.144 pessoas residentes na cidade sendo 1.022 de sexo masculino e 122 de sexo feminino. Pelo exame de sangue ficou constatado que são portadores de syphilis, 191 homens, representando 1,89 % do total e 49 mulheres, representando 40 %. Clasificando-os de acordo com as profissões, os que alcançaram o maior grau de contaminidade pertencem à classe sem profissão

### I. SHIOKAWA

UNICO IMPORTADOR  
DA PORCELLANA

MARCA

Noritake

SÃO PAULO  
R. Brigadeiro Tobias, 96 e 98-B  
TELEPHONE 4-6397  
CAIXA POSTAL 1714  
End. Tel. "ELNIPPON"

### DR. S. TAKAOKA

MEDICO-OPERADOR

Rua Fogundes, 8

Tel. 7-4683

S. PAULO

### O COMMUNISMO NO JAPÃO

II

O facto de se registrarem delitos semelhantes no Japão não tem originalidade alguma, por isso que em todos os países temos notado movimentos de ordem política contrários à segurança pública. O que nos chama a atenção não é isto. A nota mais importante que devemos observar é o facto de ser a maioria dos implicados moços vigenários, entre elles estudantes pertencentes a Universidades, alunos de escolas superiores, escolas superiores femininas e escolas normaes superiores. Porque, então, o comunismo atinge esses elementos, moços e moças superiormente instruidos? E' o problema que não deve permanecer alheio às preocupações maximas dos poderes. Por simples adoração das coisas novas vindas do exterior? Não é possível abonral-o sob um prisma tão leviano quanto erroneo. Antes nos parece lícito encaral-o como uma justa reacção contra a organização social em que vivemos. O regimen de oligarchia deixou a vida aqui dos japonezes um tanto agitada, sem garantias necessárias. E esse, infelizmente, a fenda mais visivel de que os próceres do comunismo procuram aproveitar-se na infiltração da ideia. Antes de reprehender oficialmente o comunismo, implantem dentro do territorio um regimen mais popular de governo; transformem as punições posteriores em medidas preventivas; e terão os communistas seus movimentos fracassados.

A comitiva será recebida em Roma com carácter de Estado maior, correndo a sua estadia por conta do governo italiano.

### IMPRESSOS !!!

NITIDOS  
RAPIDOS  
ECONOMICOS  
Só Nas Oficinas de "NIPPAK"

### As festividades do Templo de Suwa

As festividades em honra do Templo de Suwa, em Nakasaki, são os mais notáveis acontecimentos nos fastos sociais locais, que vinham atraindoromeiros até do exterior, desde os tempos feudais de Tokugawa. As primeiras pu-

# Ao leitor

Expirou, ao toque dos sinos, ao topo estrondoso das machinás, da meia noite de hontem, o anno de 1929, período notoriamente agitado, em todas as manifestações da vida.

Para nós, que labutamos sob esta tenda de trabalho, modesta em proporções, mas activa em seus propósitos, o anno expirante não deixou de levar consigo, uma série de acontecimentos, tristes recordações de egoísmo, covardia, traição, que caracterizam os nossos malfeitos incognitos...

E' nos sobremaneira grata, a recordação dos acontecimentos de abril, quando, de toda a parte do paiz e do exterior, onde quer que circule "Nippak Shimbun", recebemos palavras de paz, votos de solidariedade, animando-nos e encorajando-nos a sermos fortes e invincíveis combatentes contra os traidores, que procuraram, na

impossibilidade de fazerem-no pelos meios licitos, reduzir-nos aproveitando-se de um tresloucado que violou, à sombra da noite, o castello inviolável da nossa redacção e das nossas officinas.

O anno de 1929 foi farto em observações curiosas. Em varias das camadas sociais o comentário independente encontrou assumidos de sobra para abordar.

Entretanto, esquivamo-nos a formular tais assumtos, pois, somos constructores e reconstrutores e, como tais, não é o intuito nosso saber do passado que já se foi.

Aos seus leitores, assignantes e anunciantes, "Nippak Shimbun" apresenta, comovido, os cumprimentos pelo advento do Anno Novo, fazendo, ardentes, votos pela felicidade no decorrer do anno entrante.

### A QUESTÃO DE TERRAS EM TIETÉ

O Tribunal de Justiça não tomou conhecimento do recurso da Sociedade Colonizadora do Brasil Ltda.

O Tribunal de Justiça do Estado acaba de julgar um recurso interposto pela Sociedade Colonizadora do Brasil Ltda., relativo à questão de terras em Tieté, não tomando conhecimento do mesmo. Eis a transcrição do "Diário Oficial do Estado de São Paulo":

Aggravos  
Relatados pelo sr. ministro pre-

sidente do Tribunal:

N. 16039 - Monte Aprazível — (Divergência de Camaras) — Sociedade Colonizadora do Brasil Limitada, agravante, e dr. Octávio de Oliveira Pinto, agravado.

— Não conheciam do recurso, contra o voto do sr. ministro Martins de Menezes.

O Templo de Suwa esteve intimamente ligado á vida dos chinenses e hollandeses residentes em Nagasaki. Quando qualesquer viajantes iam partir, os habitantes locais rezavam no Templo pela feliz viagem.

O conhecido livro "Nippon", escrito pelo dr. von Siebold, contém bellos quadros mostrando "Kujira-biki" e "Sakai-danji" ou "Kakkodesho", danças dedicadas pelos moradores de Yorozu-machi e Kabajima-cho, respectivamente, na occasião das festividades. São estas, as festividades que serão celebradas neste outono e que os forasteiros vão assistir.

Louças, Artigos Japonezes e Nacionais

K. NISHITANI

IMPORTADOR E EXPORTADOR

Rua Conceição, 68

End. Teleg. NISHITANI

Caixa do Correio, 1134

RIO DE JANEIRO

## Foi imponente a recepção ao "Conde Zeppelin" no Japão

ALGUNS ASPECTOS E DESCRIÇÕES ENVIADOS ESPECIALMENTE PELA NOSSA SUCCURSAL DE TOKIO (V. PÁGINA 2)

(Continuação)  
Não fiquemos, porém, inertes. Não sendo possível curar os animais domésticos, aves ou mamíferos, sem constante cuidado e grande observação, procurando ver e descobrir a cada instante as razões que determinam a degeneração e o aparecimento de caracteres indesejáveis, assim também deve ser cuidadosamente verificado o desenvolvimento e a adaptação da espécie humana em nosso território, de norte a sul.

Precisamos fornecer quanto antes ao Ministério da Agricultura elementos eficientes para que, dentro das bases científicas e nas zonas, que a grande prática do Serviço do Povoamento do Sôlo nos ensinar, possa elle orientar e presidir, em seus pormenores, todo

oimento migratório, não só no que diz respeito á atracção do transporte dos indivíduos do estrangeiro para o nosso paiz, também á sua boa recepção e localização em condições vantagens. Mas, precisamos também, para que seja acompanhada a solução do imigrante, que para aqui vem cruzar-se entre si e com os elementos do paiz, fatalmente influenciando sobre o nosso tipo nômeno, tomar providências e proceder a verdadeira organização nômica.

O problema, urge confessar, é trabalhoso e complexo, mas assim sido quasi toda a adaptação biológica das mais interessantes espécies vegetais e animais, que nos auxiliam a viver. Difícil e complicada tem sido a solução do trigo, do algodoeiro, da canna de sisal. Extenuante a cultura científica do café. E não menos trabalhoso e delicado é o conveniente povoamento dos nossos campos de animais, que aqui se acclimam, dando prove vantajosa. A espe-

### JAPONEZES NO JAPÃO • NO BRASIL

Prof. BRUNO LOBO

21

### O BRASIL E A IMMIGRAÇÃO

cie humana não é possível escapar ás leis gerais da evolução e por ahí teremos de passar, não podermos evitar.

Para bem acompanhar a evolução e o desenvolvimento de povo brasileiro, necessaria tornar-se a similaridade do que é feito com as outras espécies — bem estudar a espécie humana que aqui vive. Está desenvolvendo-se bem, mantendo os caracteres morpho-biológicos mais apreciáveis ou está degenerando? Perde em estatura, peso, força, agilidade e resistência muscular? As características intelectuais superiores estão abafando-se ou se desenvolvendo? Os sentidos e inteligência atrofiam-se ou se mantêm? Emfim a espécie vence, adaptando-se ao meio vantajosamente, ou tende a extinguir-se?

Quem nos dará elementos para responder a todas estas e outras interrogações será o anthropologista, com pesquisas, observações e estudos.

Necessitamos de dar a scientistas de valor, tenaz, bem orientado, pratico nos seus methodos de accão, a E. Ropquette-Pinto, por exem-

plio, a organização e a direcção de um serviço modelar, tendente a fazer observações anthropologicas completas dos tipos humanos, que se vão pouco a pouco constituindo, se fixando dentro de certos caracteres, que poderão ser considerados peculiares ás diversas zonas do paiz, podendo de perto acompanhar a formação do povo brasileiro.

Assim agindo, conforme as verificações e as necessidades, podemos orientar o sangue novo para os pontos, em que a especie comece a desmercer, a definhar. Objecta-se e argumenta-se com as despesas, relativamente elevadas, necessarias ao custeio de serviço desta natureza. Responderemos, de passagem, que tais observações, mesmo em nosso paiz, são feitas tratando-se de animais domesticos, não sendo, portanto, de estranhar que iguais cuidados sejam dispensados á espécie humana.

Neste sentido, estudos preliminares já foram iniciados. O Museu Nacional de História Natural de ha muito que, pela Secção de Anthropologia, Ethnographia e Archeologia, acumula documentos e material. Por occasião da comemoração do centenario de nossa independencia, com o auxilio directo do Presidente Epitácio Pessoa e Ministro Simões Lopes, que muito se interessaram pelo assumpto, foi possível ao Director do Museu colocar á disposição de E. Ropquette-Pinto pequeno nucleo de auxiliares, destinados a trabalhar na determinação das características anthropologicas da população do Brasil. Muito foi feito e estamos certos que estes estudos preliminares servirão de ponto inicial ao esclarecimento de tão delicado e complexo problema, pois já outros scientistas têm organizado algumas fichas, com a mesma orientação de Ropquette-Pinto. Nestas pesquisas foi adoptada a seguinte ficha

# O 'CONDE ZEPPELIN' NO JAPÃO



Lindo aspecto da baía de Matsushima apanhado [à passagem do "Zeppelin"]

No noite de 18 de agosto, falmos soltaram vivas. "Chegastes lava-se nesta capital que o grande demasiadamente cedo!" — exclamava dirigível alemão "Conde Zeppelin", vencendo vitoriosamente a sua histórica etapa Friedrichshafen-Tokio, que faz parte do seu grande vôo em volta do globo, ia chegar ao meio dia do dia seguinte no aeródromo naval de Kasumigaura, a 38 milhas ao leste desta capital, onde se acha uma das quatro maiores "hangars" do mundo, única capaz de acolher a gigante nave. O entusiasmo do povo nipônico que vinha tomado incremento desde o dia 15 do referido mês, quando o "Zeppelin" iniciou o seu vôo ao Extremo Oriente, chegava ao auge.

Na manhã seguinte, grande massa de entusiastas, entre elles varias centenas de membros da colônia alemã aqui domiciliada, embarcava na Estação de Ueno com destino a Kasumigaura. Apesar dos trens especiais que partiam a cada instante para Tsuchiura, a estação mais proxima de Kasumigaura, em grande numero, cada trem viajava sempre com lotação excessiva. Nesta capital, os guarda-civeis foram obrigados a tomar medidas severas contra os populares que se aglomeravam nas ruas, vendo com atenção o céo, impedindo, assim, o transito publico. Na Guinza, a principal rua de Tokio, debaixo de uma atmosfera alegre, diversas lojas e vitrinas eram ornamentadas com bandeiras e miniaturas do "Conde Zeppelin". Pouco depois do meio dia, o commandante Eckener mandou um radio avisando o povo tokiano de que o seu dirigível dava uma volta sobre as cidades de Tokio e Yokohama, antes de se atterrizar em Kasumigaura.

## O "Zeppelin" aparece sobre Kasumigaura

Finalmente, 5 minutos após as quatro horas da tarde, quando algumas pessoas que se achavam em cima das arvores vigiando, observaram uma bola de prata no céo, todos os espectadores que o aguardavam ansiosos, avistaram o corpo gigantesco do "Zeppelin". A bola aumentava a cada instante as proporções, sendo visto, daí dez minutos, a grande aeronave sobre o campo.

Para mais de 50.000 pessoas era uma visão de inspiração e beleza. Do tamanho de ervilha cresceu ao de maçã, até que, finalmente, a uns 300 metros de altura, fazia suas manobras de corteza, marcando o passo com uma fita de fumaça alva como prata. Era devêrs baixa essa monobra, o que permitiu ver claramente as faces das janellas da gondola.

Quando o "Conde Zeppelin" estava na altura de 150 metros, sobre o campo, um grupo de alle-

Imponente recepção ao commandante Eckener e sua comitiva — O "Conde Zeppelin" é mensageiro do povo alemão para fraternização teuto-nipônica, diz o dr. Eckener — A atenção ligada pelo Mikado aos heróes do ar

Interesses tomados pelo povo japonês ao etapa glorioso — Outras Notas

(Aspectos e descrições enviados especialmente pela nossa Succursa em Tokio)



A gigantesca aeronave abrigada na "hangar" de Kasumigaura

Milhões de "Banzai" saudando o "Zeppelin" partiam de todos os lados, quando o gigante voava muito baixo, sobre as cidades de Tokio e Yokohama, quando o sol, agonizante, ia desaparecendo pouco no horizonte.

## "BANZAI"

Milhões de "Banzai" saudando o "Zeppelin" partiam de todos os lados, quando o gigante voava muito baixo, sobre as cidades de Tokio e Yokohama, quando o sol, agonizante, ia desaparecendo pouco no horizonte.

## Glorioso fim do histórico vôo

Após prolongado cruzeiro sobre Tokio e Yokohama, o "Zeppelin" volveu a Kasumigaura.

A's 18 horas e 2 minutos, precisamente, guiado por 4 aviões-pilotos, e ao som de uma marcha militar espirituosa, seguida de vivas e aclamações do povo, o "Zeppelin" reaparecia sobre o aeródromo de Kasumigaura. Na altitude de 300 metros, o "Zeppelin" fez a meia volta à esquerda e foi descendo a pouco e pouco. As condições de aterrissadouro eram excellentes, e sobre o campo havia uma calma extraordinária comparável à da manhã. Os "hurrahs" dos alemães e "banzai" dos japoneses presentes foram tributados pelos passageiros do dirigível que cumprimentavam pelas janellas. O sol havia escondido de traz das montanhas e o seu raio palido reflectia o corpo imenso prateado do dirigível. A sombra do Monte Tsukuba estava sensível como um fino nevoeiro.

Eram 18 horas e 20 minutos quando a histórica etapa estava gloriosamente terminada.

Após as formalidades de estilo, o commandante Eckener desembocou do barco, segundo-lhe o tenente Fujiyoshi, os srs. Kitano e Enchi, enviados, respectivamente, dos jornais Asahi e Osaka Mainichi, a senhorita Drumond-Hay e todos demais passageiros. Notamos em todas as faces imensas satisfações e intermin-

veis alegrias. Nessa ocasião a conseguido este magnífico aterradouro no Japão. Tenho sempre tido viva vontade de conhecer esta terra de sol nascente e chrysantemos, aliás como todos outros patrícios meus a têm. Quando me lembrei que o Japão possuia uma "hangar" suficiente demais para acolher o "Zeppelin", o plano do vôo directo Friedrichshafen-Kasumigaura estava feito e decidido. Encontrei durante esta etapa varias experiências raras. A minha impressão sobre vasta, inculta e inhabitada região da Sibéria, e numerosos prisioneiros exilados reduzidos à miseria, já-mais poderei olvidar. E as impressões agradabilíssimas, acima das minhas expectativas, tive, quando a nossa nave passava sobre os campos caprichosamente cultivados e as casas elegantemente construídas situados entre o Norte e Tokio.

## O Dr. Eckener responde

Foi seguinte o discurso do Dr. Eckener, em resposta ao representante do governo japonês:

É sobremaneira grato termos



Dr. Eckener, Primeiro Ministro Hamaguchi e ministro da Viação (esquerda para direita)

## Aviação Civil no Japão

A rebatinha para o comando do mar de atrevez de mais de três séculos tem sido transformada, agora, em façanhas ao sr. Ancião, na defesa dos seus interesses no Oriente, o Japão, criou em 1920 uma inspetoria de aviação, com o fim de fomentar a aviação civil no Império. Entre outras medidas, a inspetoria tem sido incansável na instrução de aviadores e mecânicos. Uma verba de 1.600.000 yens foi aberta em 1927 para o estabelecimento de duas importantes linhas aéreas, uma entre Tokio e Dairen e outra entre Osaka e Shanghai. Em 1920, com subvenções e outras despesas feitas pelo governo pela causa da

aviação civil eram apenas de 50.000 yens, o que no ano passado ascendeu a 356.000 yens. Os vôos entre longas distâncias receberam a especial atenção do nosso governo. Eram realizadas com resultado de três viagens semanais entre Osaka e Fukuoka, Tokio e Osaka, Sakai e Oita, e Tokio e Sendai. Além dessas viagens regulares, seis viagens são realizadas anualmente entre Osaka e Dairen e Osaka e Shanghai. Afim de promover rápido progresso na aviação e garantir os vôos, o governo sancionou a Lei da Aviação em 1 de janeiro de 1927, com vários regulamentos suplementares.



O "Conde Zeppelin" aproximando-se do aeródromo de Kasumigaura

## Os heróes do ar agraciados pelo Imperador

Entre as varias visitas feitas pelo dr. Eckener e sua comitiva durante a sua estadia entre nós, a mais importante foi a visita ao primeiro ministro, em sua residencia oficial de Nagata-cho, quando o sr. Yuko Hamaguchi, primeiro ministro, externou as mais cordialas boas-vindas aos illustres viajantes.

O ministro do Exterior manda uma mensagem de congratulação

cão

O commandante Hugo Eckener recebeu do barão Shidehara, ministro do Exterior, uma mensagem de congratulação, externando seus sinceros votos de boas-vindas, em que elogia a actuação corajosa dos alemães no terreno das sciencias, contribuindo proficuentemente á felicidade humana.

E termina dizendo que os desenvolvimentos dos meios de transporte e comunicação têm incurtado as distâncias entre as nações do mundo, sendo notável a sua contribuição para promover melhor entendimento e cooperação entre todos.

## A mensagem do Primeiro Ministro ao Governo Alemão

Logo após á chegada do "Conde Zeppelin" a Kasumigaura, o sr. Yuko Hamaguchi, primeiro ministro, enviou ao governo alemão um telegramma, congratulando-se pela chegada vitoriosa da grande nave ao Japão.

## 11.021 kilómetros vencidos pelo "Conde Zeppelin"

Imediatamente á chegada a Kasumigaura, o dr. Eckener comunicou que o "Conde Zeppelin" havia vencido 11.021 kilómetros, distância entre Friedrichshafen e Kasumigaura, em 99 horas e 40 minutos. Eis a relação das distâncias e tempo despendido: (Partida de Friedrichshafen: 15 de Agosto de 1929, às 3,55, em hora japonesa.)

Data	Hora da chegada	Localidade	Distância de Friedrichshafen (kilómetros)
19.18	17	Berlim	9.45
19.19	16	Koenigsberg	1.164
19.20	14.13	Vologda	2.498
19.21	2.00	Ural	3.709
19.22	22.48	Yenisei	5.147
19.23	6.24	Yakutsk	7.367
19.24	8.157	Asya (port)	8.157
19.25	10.074	Hokkaido	10.074
19.26	11.021	Kasumigaura	11.021

## O advento da era de turismo moderno no país de sol nascente e chrysantemos!



O commandante Eckener passeando pelo Jardim de Hibiya, Tokio